

【追悼文】

湯佐祚子会員のご逝去を悼む

琉球大学医学部附属病院 高気圧治療部部長 合志清隆



本学会の理事を長く務めておられた湯佐祚子元琉球大学医学部附属病院高気圧治療部部長は2013年6月30日にご逝去されました。享年77歳でした。

先生は1960年に名古屋大学医学部を卒業されて実地修練後に、1963年7月から米国エール・ニューヘブン病院麻酔科アシスタントレジデント、1965年7月からアルバートアインシュタインメディカルセンター麻酔科レジデント、1966年8月からルイジアナ州チャリティ病院麻酔科レジデントの勤務から帰国され、1967年7月から愛知県がんセンターに勤務されています。その後に鳥取大学医学部助手として移られ講師になられた後に、1972年11月から琉球大学保健学部助教授で赴任されると同時に同病院麻酔科科長と中央手術部長

を併任されています。その後の1978年11月から同病院高気圧治療部部長も担当されていますが、この間にも1982年から約1年間は文部省在外研究員として米国で研究活動を行っておられます。さらに、本学会の理事としても活躍され、1985年には沖縄で第20回本学会会長を務めておられます。

先生の経歴を詳述したのは、米国で麻酔科の研鑽を長期に渡って積んでこられた、当時としては国内で稀有な女性の臨床医であることを物語っているからです。琉球大学病院では全ての全身麻酔の管理を担当され、さらに高気圧酸素治療の診療にも精力を傾注されていました。特に麻酔科の専従医が先生を含めて2名のなかで全身麻酔管理を一手に引き受けられており、その当時を知る職員の話では麻酔科業務だけでも多忙を極めていたようです。また、歯に衣着せぬ物言いは外科系医師の責任者にも直截的であり、当時の看護師からは絶大な支持を集めたと聞きます。

麻酔科だけではなく高気圧酸素治療にも携わっておられたのは、その当時の沖縄では潜水漁業やフーカー潜水でのモズク漁は基幹産業でもあり、重症の減圧障害が後を絶たなかったからですが、その対策として先生の赴任後の1973年に多人数用治療装置が琉球大学病院に導入されています。これには本学会の初代理事長である榎原欣作先生の推挙があったと聞いております。

先生の高気圧医学に限った臨床と研究で注目に値することは、重症患者の高気圧酸素治療の管理は先駆的なものでしたし、この治療法で問題となる酸素中毒に関連した基礎研究の重要性です。特に酸素中毒の研究は米国の短期留学で複数の重要な結果を報告されておりますが、活性酸素とスカベンジャーを概説された本学会誌掲載の論文 (Vol. 31:153-67) は今でも読み応えのあるものです。

琉球大学を定年退職後は名古屋の医療施設に席を置かれていたようです。本年5月には先生から直接電話連絡があり、食道疾患の術後が芳しくないと話しておられ、一日も早い回復を皆で願っておりました。

湯佐先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。